いちょうの実

宮沢賢治

青空文庫

そらのてっぺんなんかつめたくてつめたくてまるでカチカチのやきをかけた鋼です。そして星がいっぱいです。けれども東の空はもうやさしいききょうの花びらのようにあやしい底光りをはじめました。

その明け方の空の下、ひるの鳥でもゆかない高いところをするどい霜のかけらが風に流されてサラサラサラサラ南のほうへとんでゆきました。

じつにそのかすかな音が丘の上の一本いちょうの木に聞こえるくらいすみきった明け方です。

いちょうの実はみんないちどに目をさましました。そしてドキッとしたのです。きょうこそはたしかに旅だちの日でした。みんなも前からそう思っていましたし、きのうの夕方やってきた二わのカラスもそういいました。

「ぼくなんか落ちるとちゅうで目がまわらないだろうか。」一つの実がいいました。

「よく目をつぶっていけばいいさ。」も一つが答えました。

「そうだ。わすれていた。ぼく水とうに水をつめておくんだった。」

「ぼくはね、水とうのほかにはっか水を用意したよ。すこしやろうか。旅へ出てあんまり

心(こころ)持(も)ちのわるいときはちょっと飲(の)むといいっておっかさんがいったぜ。」
「なぜおっかさんはぼくへはくれないんだろう。」
「だから、ぼくあげるよ。おっかさんをわるく思(おも)っちゃすまないよ。」
そうです。このいちょうの木(き)はおかあさんでした。
ことしは千人(にん)の黄金色(きんいろ)の子(こ)どもが生(う)まれたのです。
そしてきょうこそ子(こ)どもらがみんないっしょに旅(たび)にたつのです。おかあさんはそれをあんまり悲(かな)しんでおうぎ形(がた)の黄金(きん)の髪(かみ)の毛(け)をきのうまでにみんな落(お)としてしまいました。
「ね、あたしどんなとこへいくのかしら。」ひとりのいちょうの女(おんな)の子(こ)が空(そら)を見(み)あげてつぶやくようにいいました。
「あたしだってわからないわ、どこへもいきたくないわね。」もひとりがいいました。
「あたしどんなめにあってもいいから、おっかさんとこにいたいわ。」
「だっていけないんですって。風(かぜ)が毎日(まいにち)そういったわ。」
「いやだわね。」
「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまうんでしょう。」
「ええ、そうよ。もうあたしなんにもいらないわ。」

「あたしもよ。今までいろいろわがままばっかしいってゆるしてくださいね。」
「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。ゆるしてちょうだい。」
東の空のききょうの花びらはもういつかしぼんだように力なくなり、朝の白光りがあらわれはじめました。星が一つずつきえてゆきます。
木のいちばんいちばん高いところにいたふたりのいちょうの男の子がいいました。
「そら、もう明るくなったぞ。うれしいなあ。ぼくはきっと黄金色のお星さまになるんだよ。」
「ぼくもなるよ。きっとここから落ちればすぐ北風が空へつれてってくれるだろうね。」
「ぼくは北風じゃないと思うんだよ。北風はしんせつじゃないんだよ。ぼくはきっとからすさんだろうと思うね。」
「そうだ。きっとからすさんだ。からすさんはえらいんだよ。ここから遠くてまるで見えなくなるまでひと息に飛んでゆくんだからね。たのんだら、ぼくらふたりぐらいきっといっぺんに青ぞらまでつれていってくれるぜ。」
「たのんでみようか。はやく来るといいな。」
そのすこし下でもうふたりがいいました。

「ぼくはいちばんはじめにあんずの王様（おうさま）のお城（しろ）をたずねるよ。そしておひめ様（さま）をさらっていったばけものを退治（たいじ）するんだ。そんなばけものがきっとどこかにあるね。」

「うん。あるだろう。けれどもあぶないじゃないか。ばけものは大（おお）きいんだよ。ぼくたちなんか、鼻（はな）でふきとばされちまうよ。」

「ぼくね、いいもの持（も）っているんだよ。だからだいじょうぶさ。見（み）せようか。そら、ね。」

「これおっかさんの髪（かみ）でこさえた網（あみ）じゃないの。」

「そうだよ。おっかさんがくだすったんだよ。なにかおそろしいことのあったときはこのなかにかくれるんだって。ぼくね、この網（あみ）をふところにいれてばけものに行（い）ってね。もしもし。こんにちは、ぼくをのめますかのめないでしょう。とこういうんだよ。ばけものはおこってすぐのむだろう。ぼくはそのときばけものの胃（い）ぶくろのなかでこの網（あみ）をだしてね、すっかりかぶっちまうんだ。それからおなかじゅうをめっちゃめちゃにこわしちまうんだよ。そら、ばけものはチブスになって死（し）ぬだろう。そこでぼくはでてきてあんずのおひめ様（さま）をつれてお城（しろ）に帰（かえ）るんだ。そしておひめ様（さま）をもらうんだよ。」

「ほんとうにいいね。そんならそのときぼくはお客様（きゃくさま）になっていってもいいだろう。」

「いいともさ。ぼく、国（くに）を半分（はんぶん）わけてあげるよ。それからおっかさんへは毎日（まいにち）おかし

やなんかたくさんあげるんだ。」

星がすっかりきえました。東の空は白くもえているようです。木がにわかにざわざわしました。もう出発に間もないのです。

「ぼく、くつが小さいや。めんどうくさい。はだしでいこう。」

「そんならぼくのとかえよう。ぼくのはすこし大きいんだよ。」

「かえよう。あ、ちょうどいいぜ。ありがとう。」

「わたしこまってしまうわ、おっかさんにもらった新しい外套が見えないんですもの。」

「はやくおさがしなさいよ。どのえだにおいたの。」

「わすれてしまったわ。」

「こまったわね。これからひじょうに寒いんでしょう。どうしても見つけないといけなくってよ。」

「そら、ね。いいぱんだろう。ほしぶどうがちょっと顔をだしてるだろう。はやくかばんへ入れたまえ。もうお日さまがおでましになるよ。」

「ありがとう。じゃもらうよ。ありがとう。いっしょにいこうね。」

「こまったわ、わたしどうしてもないわ。ほんとうにわたしどうしましょう。」

「わたしとふたりでいきましょうよ。わたしのをときどきかしてあげるわ。こごえたらいっしょに死(し)にましょうよ。」

東(ひがし)の空(そら)が白(しろ)くもえ、ユラリユラリとゆれはじめました。おっかさんの木(き)はまるで死(し)んだようになってじっと立(た)っています。

とつぜん光(ひかり)のたばが黄金(きん)の矢(や)のように一度(ど)にとんできました。子(こ)どもらはまるでとびあがるくらいかがやきました。

北(きた)から氷(こおり)のようにつめたいすきとおった風(かぜ)がゴーッとふいてきました。

「さよなら、おっかさん。」「さよなら、おっかさん。」子(こ)どもらはみんな一度(ど)に雨(あめ)のようにえだからとびおりました。

北風(きたかぜ)がわらって、

「ことしもこれでまずさよならさよならっていうわけだ。」といいながらつめたいガラスのマントをひらめかしてむこうへいってしまいました。

お日様(ひさま)はもえる宝石(ほうせき)のように東(ひがし)の空(そら)にかかり、あらんかぎりのかがやきを悲(かな)しむ母親(ははおや)の木(き)と旅(たび)にでた子(こ)どもらとに投(な)げておやりなさいました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店――宮沢賢治童話集　1」青い鳥文庫、講談社
　1985（昭和60）年1月24日第1刷発行
　2004（平成16）年6月7日第52刷
入力：劉斗
校正：小林繁雄
2011年3月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いちょうの実

宮沢賢治

２０２０年　７月１８日　初版

奥　付

発行　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　青空ヘルパー　赤鬼@BFSU
URL　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/